

「下種げしゅの期間」 ～土壁に咲く花を夢見て～

第5回 三間を超えて

所属 建築研究所
主任研究官 水上 点晴

面壁九年とは、禅宗の始祖とされる達磨大師が、少林寺に籠もって、悟りを得るまでに九年間、壁に向かって座禅を組み続けた逸話を指している。座禅ではないにせよ、同じく壁に向かい、土を一心不乱に塗り続ける行為は、時に悟りを得る修行のように感じられる。実際、壁塗りを軸とした家づくりを続ける中で、形容しがたい境地になったことがあり、これを幾つか紹介したい。

土地の開拓を「草を刈り土を辟へきす」と言い表わす慣用語がある。出勤前の早朝の時間を使って、家づくりに先駆けて始めた草刈りで、私は多くのひらめきを得た。その1つを紹介すると、辟した土を使って、その文字通り、壁を作るようにしたことである。私が好きな童話に、宮沢賢治の「ありときのこ」がある。蟻たちが暮らす平和な日常に、一夜にして突如として現れた巨大な塔をめぐる話だが、我が家も、移築先の雑木林の土を使って地面と壁を連続させることで、自然の環境に溶け込み、「キノコが土から生えたような家」にできると閃いたのだ。そしてこの草刈りという行為が、なぜひらめきの源泉となり得るのかを考えた。それは大掃除を例にとると分かりやすい。自らが置かれた環境を整理整頓することで、その環境に呼応するかのように、自らの思考や心境も片付いて行くのである。これはジョギングや登山にも言える。周囲の景色が進んで行くに連れ、行き詰ったと思っていたアイデアにも光明が見えてくるのである。前号で示したように、これらはすべて単純作業で、表層意識を休ませることができるとも大きな



写真 地鎮祭の様子

い。「環境と意識はどうも連動するらしい」と感じた私は、次に地鎮祭を催すことを閃いた。

時は4月4日。まだ雑木林が芽吹く前

の若干肌寒い朝、四方に立てた篠竹に横綱を張りめぐらし、海の幸と山の幸をお供えした。山の神は女性の神だと言われている。南方熊楠も粘菌を探して山に立ち入る時は、ナニを露わに立ち小便して女神を喜ばせることが、珍しい粘菌を見つける秘訣だと話していた。そこで春の訪れに、期待とつぼみを膨らませた枯れ木を向こうに、こちら裸一貫、まわしを締めての土俵入りと相成った。四股を踏んで地を鎮め、八卦良しとの晴れ姿。幼少期を育ててくれ、相撲好きだった祖母の喜ぶ顔が、目に浮かんだ。お蔭様で、これまで大きな怪我も災害も無く、ここまでやってこれたことを思うと、土地の精霊にも、ここに根を張る許しを頂けたのだと思っている。

そして棟上げを前に忘れられない1日がある。この日、私は手伝ってくれた友人と3人で、足場の設置作業を行っていた。単管を立てながら地上と高所を行ったり来たり、縦横無尽に空間を移動する、労の多い作業の連続ではあった。しかし、これまで基礎の平面的な区割りが、僅かにそこに家が建つことを示す手がかりであったに過ぎなかったものが、これから建つ予定の家を、立体的に縁取るかのように足場が立ち現れたため、想像が一気に膨らみ、達成感もひとしおであった。雑木林にぽっかり空いた空間に、差し込んでいた陽の光も、いつしか単管の影を長く伸ばすように傾き、今日はこれまでと、地上に降りて集まった頃には、もう黄昏時となっていた。お互いの仕事ぶりを褒め称えながら、薄暗く見えなくなっていく表情と共に、会話が途切れ、「遠い昔、こんなことがあったよな。いつの頃だったんだろうか」と記憶を辿ろうとした。その刹那、傍らに並ぶ口について、同じ問いが発せられたのである。それどころか、私でも彼でもないもう1人の口から、「私も同じことを考えていた。小学生の頃、まだ帰りたくないのに、母親の呼ぶ声が聞こえてきて・・・。バイ

ビーって。」と。「あの時居たよね、こうやって3人で遊んだことあったよね」と話す3人は、歳も違えば、生まれ育った場所も違い、そんなことあるはずがないのであるが、確かにあの刹那、我々は同時に子供に還り、過去は書き換えられたのである。

中世、ブルネレスキが消失点を絵の中心に置き、ダヴィンチが透視画法を発展させる以前は、三次元の世界を二次元で表現する場合、現在の幼稚園児が描く絵のように、奥行きが感じられない平面的な絵ばかりであった。この世界観を保持しながら次元を落とすという行為が、消失点に比類するような「時空を歪ませる瞬間」を生むのではないだろうか？先の体験は、足場上から地上に戻るという3次元を2次元に折り畳む行為に先導されていた。また太陽が沈むことによって、カラーからモノクロの世界に転じていた。暗闇で2次元的な広がりをも失った上に、過去をセピアカラーと表現するように、これは時間軸上の退行をも意味する。空間、時間と呼びは変わるが、もう1つ間を持つものに人間がある。空間・時間で構成される環境の次元を落とし、原初の点へと回帰する働きが、人間の意識へと連動する。故に3人の間の垣根が取り払われて、共通の記憶が生まれたのでは無からうか？

この考えを支持する今一つの体験が壁塗りにある。全ての壁を土壁で塗ろうと考えた結果、早朝や夜間をおして壁塗りに励んでいた頃のことである。最初は「平らにせねば」、「うまく塗ろう」との考えが、常に意識を占めて力んでいたのだが、そのうち両腕に心地よい疲労の色を感じるようになり、プールの後のような脱力感に襲われる。またドラム缶で練る土の硬さも、鋤に盛る土も、定食屋のベテランのおばちゃんがよくご飯のように、安定した柔らかさと量、スピードで繰り返されるようになる。すると次第に、壁塗りの所作も、車のワイパーのように、単調なリズムを刻むようになり、まるで自らを催眠術にかけたかのように、意識が遠く旅に出かけ



写真 思い出の足場と棟上げ後の全景

てしまうのであった。学生時代お世話になった下宿先のお母さんが、震災前に

の話をしてくれたことがあった。子供のころから餅屋に育った旦那さんは、忙しい年末には、夜通し、機械化された餅つき杵の脇で臼とりに励んでいたそうである。「お父さんまた居眠りしているよ」と振り返ると、こくりこくりと船を漕ぎながらも、杵につかれることなく、手は自らの意思を持つかのように、臼とりを続けていたそうである。鋤を持つ私の右手も、きっとそのような状態であったのだろう。次第に意識が戻り始め、視界の端から色を帯びてくのに従い、目の前に百足の姿を認めてからも、にわかに身体は反射せず、ただぼんやりとその百足の動きを見つめるだけであった。その百足は、数ある足の後ろ半身で、そそり立つ壁を相手に身体を支え、上半身はといえば、振り子のように左右に振りながら、次なる手がかりを探しているのであった。そして、未だ勝手に動いている我が右手と、百足の揺動運動が互いにシンクロしていることさえも、さも当然と眺めている私は、その刹那、右手と百足どちらに戻ろうか逡巡していたのである。

壁塗りという行為は、塗り進めば進むほど、空間を閉じていくことになる行為である。また閉じていくにしたがって、外部からの光線を遮ることとなり、薄暗くすなわち時間が退行していく。ましてやこの場合、土地から出た土を、壁として復元しているのであり、むしろ、土地という土塊から彫り出すように家を作っていると考えれば、土を塗る行為は、時間を巻き戻しているようにさえ思われるのである。そしてこの時空間の凝縮が、人とのみならず、百足との垣根まで取り払い、胡蝶の夢ならぬ百足の夢を見させてくれたのでは無からうか？

禅は論理的に説明するのが難しく、専ら体験的に知覚されるのみであり、また体験的なものはまったく個人に属し、その人の経験を背景としなくては意義を持たないものと言われている。他人から見ると取るに足らない出来事に思えるかもしれないが、私にとっては忘れ得ぬ体験であった。家づくりを始めて、今年で15年になる。達磨さんでも9年かかったのであるから、まだまだと、百足や樹々に教を乞うて、今日も私は壁を塗る。